魚食文化四世紀の歴史発掘

日本橋魚河岸の来歴

第四回　消えゆく魚河岸

執筆・冨岡一成
挿絵・森火山

家康公の江戸入りと共にやってきた小田原町の魚問屋たちは、幕府御用のプライドと経済力により、江戸庶民文化のパトロン的役割を果たす「江戸ッ子」でした。

一方、魚河岸でも若い衆らは「いき」と「はり」に男をみがく侠気の輩。空威張りの「江戸ッ子」の象徴的存在ともいえるでしょう。江戸ッ子の二面性を兼ねそなえた魚河岸の人びとの動向は良しにつけ悪しきにつけ、それなりの社会的影響力をもっていました。

魚河岸は江戸庶民史にどのような役回りを演じたのでしょうか。人と事件をながめながら当時の雰囲気を感じてみましょう。

助六と魚河岸

「……小田原町は所謂江戸ッ子にして、江戸役者をほめ、市川団十郎を贔屓にするも此ゆえなるべし……」

これは文化七年（一八一〇）、新春の中村座顔見世興行につめかけた魚河岸連中の総見の様子を賞嘆する大田蜀山人の一文です。蜀山人は、号を南畝といい、寛延二年（一七四九）生まれ、七十俵五人扶持という軽輩の御徒衆ながら、戯作者、狂歌師として江戸の市井風俗を映しました。かれは魚河岸の旦那衆が団十郎を大いに贔屓するのを、さすが江戸ッ子だ、と褒め讃えているわけです。ここで魚河岸の団十郎びいきというのは、とりもなおさず市川家の代表演目「助六」に対する後援を意味します。

「助六」は関東に伝わる仇討伝説の人気者曽我五郎のお話に、大坂の「千日寺心中」という竹本義太夫をとり込んでつくられました。ところが二代目市川団十郎が寛延二年（一七四九）に演じた「助六」によって、民間伝承劇は江戸町人の実像を映した権力への抵抗劇として生まれ変わります。すなわち江戸町人の代表たる主人公助六が、いっぽうの敵役である髯の意休に対し、啖呵を切り、罵詈雑言を浴びせ、徹底的にやっつける、その荒事に江戸庶民は酔いしれ、喝采を送りました。超人助六の活躍ぶりは、江戸庶民感情の浄化作用を果たしながら、幕末まで実に百年にもわたり正月の江戸三座顔見世興行を飾ることとなります。その「助六」狂言を後援する魚河岸こそ江戸ッ子だと蜀山人はみました。

「助六」と魚河岸のかかわりは、一説には曽我五郎になぞらえた主人公の花川戸助六のモデルが、持ち前の男気から人の身代りに牢死した魚問屋ともいわれます。しかし、定説となっているのはむしろ、助六が河東節にのって花道を踊る場面――これが大きな見せ場になるわけですが、この河東節を創始した十寸見河東が魚河岸出身という由縁からのようです。「助六」を河東節でやる限り、魚河岸の承諾を得なければならないという不文律がいつからか生まれました。歴代団十郎は、助六上演の際には必ず魚河岸に挨拶に出向いたといいます。

魚河岸の旦那衆も立派な引き幕を贈り、初日には総見し、助六が花道で見得を切るところでは魚河岸連中のお手を拝借してシャンシャンというのがしきたりとなります。また、火事などで芝居小屋が焼失の憂き目に遭えば、これを再建するために資金を融通することもありました。

「江戸時代には、夜の明けないなかに支度して、提灯をつけて家を出て芝居見物に行く」（森火山談）
（東京魚市場卸協同組合所蔵）

芝居は江戸人の最大の娯楽でしたが、とりわけ魚河岸の入れ込みは相当なものでした。旦那衆ばかりでなく、若い者や娘子供まで芝居見物は何よりも好きで、「芝居の初日に出かけるような娘は嫁にするな」などと、江戸の町衆のあいだでいわれたものですが、魚河岸の娘たちはそんなことにはおかまいな

「見得に芝居の引幕をよく出す。役者も魚河岸の文字のある幕が幅がきく」（森火山談）（東京魚市場卸協同組合所蔵）

しだったといいます。

江戸ッ子にふたつある

江戸ッ子といえばよく、「宵越しの銭は持たない」気風の良さや「はらわたのない」さっぱりとした性分を挙げます。言いかえるなら、銭も貯められない、大した分別も持たない連中。落語の熊さんや八つぁんのようなその日暮らしの下層庶民を指しているのでしょう。ところが江戸ッ子がみんな浮草のような存在かというとそうではないようです。なかには経済力を持ち、洗練された文化生活をする根生いの江戸ッ子というべき大町人も多数いました。いわば実力派の江戸ッ子です。西山松之助氏は『江戸ッ子』の中でこうした江戸ッ子の二重性を明らかにされています。江戸の大半は諸藩の武家屋敷。人口のほとんどは地方人でした。そこに流れついた素性の知れない自称「江戸ッ子」が空威張りするなかで、根っからの江戸人は「おらあ江戸ッ子だ」と言わないけれど、江戸生まれを誇りとし、庶民文化に対する造詣の深さと、時にパトロン的にそれを育んできた人びとだったのです。

江戸開府以来の日本橋魚問屋たちはまさにそのような実力派の江戸ッ子といえるでしょう。団十郎びいきはそのひとつですが、遊び好きの旦那衆は吉原でも、蔵前の札差ばりの派手な振る舞いをしますし、信心にかこつけた物見遊山も盛んで、伊勢詣、大山詣、成田詣など、各地の寺社には魚河岸寄進のものが残されています。また、かれらのうちから後世に残る文化人も多く輩出されました。その代表として、松尾芭蕉の門人として有名な杉山杉風と寶井其角について見てみましょう。

杉風と其角

『奥の細道』で知られる俳人松尾芭蕉は、寛文十二年（一六七二）江戸に下り、日本橋魚河岸に草鞋を脱いだことは前にみました。

鎌倉を生きて出でけん初鰹

初鰹の景気を詠んだ気持の良い句です。魚河岸の荒っぽい活気も好ましく感じていたのでしょうか。芭蕉が身を寄せていた魚問屋というのは、小沢仙風の俳号を持つ鯉問屋杉山賢水宅でした。その長男にあたるのが、芭蕉の支持者であり、芭蕉十哲の一人として名をはせた杉風です。

杉風は師に対する経済的な援助を通じて最大の功労者といわれています。家業の鯉問屋が魚河岸でも大変に羽振りが良かったことが芭蕉への庇護を可能にしたのでしょう。鯉屋では鯉を囲っておくための生簀を深川に持っていました。その番小屋を改造したのが芭蕉庵で、その名も生簀に植わっていた芭蕉からつけられたともいわれ、「古池や蛙飛び込む水の音」の有名な句も芭蕉庵で詠まれたと伝えられます。

ゆく春や鳥啼き魚の目はなみだ

元禄二年（一六八九）三月二十七日、芭蕉庵を出て舟で隅田川をさかのぼり、千住で送別の人たちに別れを告げます。「おくのほそ道」への旅立ちです。そのとき芭蕉は長年世話になった杉風に対してこの句を詠みました。杉風は芭蕉の北行にあたって、春先の寒さを案じ、その出発をとどめたといいます。互いのあたたかい心の通じ合いがこのような留別の句を詠ませたのでしょう。あるいは魚という一文字には、自らが魚河岸で過ごした若き日への決別の念がこめられていたのかもしれません。

杉風は、正保四年（一六四七）幕府鯉納入御用問屋の長男として生まれました。通称鯉屋市兵衛、または鯉屋杉風と称し、寶井其角、服部嵐雪とともに芭蕉門下の代表的俳人で、流行を追わない着実な作風は、人柄とともに芭蕉のもっとも信頼のおく門人でした。

頑なに月見るやなほ耳遠し

影ふた夜たらぬ程見る月夜かな

がつくりとぬけ初る歯や秋の風

最初の句にもみられるように　杉風は聾者で耳がひどく遠かったといいます。同門の粋で鳴らせた其角は、杉風は耳が聞こえぬから世間に遅れている、などと揶揄しましたが芭蕉はひどく機嫌を損ねてたしなめたといいます。また、杉風は俳諧以外にも絵画を狩野派

冨岡一成
（とみおか いっせい）

1962年東京生まれ。（株）国際魚食研究所主任研究員。博物館やイベント企画等の仕事を経て築地市場に勤務。
日本橋時代から連綿と続く“河岸の気風”を身をもって知り、十年前から市場の古老から聞き取りを開始。その後、ＨＰ『魚河岸野郎』『築地の魚河岸野郎』の制作に携わり、幅広い史実調査に基づいた“魚河岸三部作”（「魚河岸四百年」「講談魚河岸年代記」「再現日本橋魚河岸地図」）を発表、高い評価を受ける。以降も執筆、ブログ等を通じて、重厚な歴史記述から奇想天外な読み物まで、消え行く魚河岸を“河岸の表現者”の視点から描き続けている。
HP『魚河岸野郎』
http://www.sakanaya.co.jp
『築地の魚河岸野郎』
http://www.uogashiyarou.co.jp

に学び、その筆致はきわめて写実的。かれの手になる「芭蕉像」は多くの肖像のなかでも最も信頼されるものとしてのちに大英博覧会にも出品されました。

杉風と師芭蕉とのこまやかな心情のやりとりを伝えるものとして、芭蕉が杉風に送った遺書をご紹介したいと思います。

「杉風へ申し候。久々厚志、死後迄忘れ難く存じ候。不慮なる所にて相果て、御暇乞ひ致さざる段、互ひに存念、是非なき事に存じ候。彌俳諧御勉め候ひて、老後の御楽しみになさるべく候」

杉風に申します。長い間親切な志をたまわりましたことを死んでも忘れません。思いがけない所で命果てることとなり、お別れを伝えに行けないことが、互いに心残りですが、これも仕方ありません。あなたはこれからも俳諧に力を入れて、老後の楽しみになさってください。

杉山杉風と並ぶ芭蕉の代表的門人の寶井其角は、もとは医師でした。のちに問屋株を買って魚問屋となることから魚河岸出の江戸ッ子俳人とみてよいでしょう。

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春
夕涼みよくぞ男に生まれける
越後屋にきぬさく音や更衣

洒落者、其角には軽妙で庶民的な江戸情緒をたたえた作風とともに、数々のエピソードが残されています。なかでも講談などで有名なのが、赤穂浪士討ち入りの前夜、大高源吾との両国橋での別れです。

時は元禄十五年（一七〇二）十二月十三日、舞台は江都両国橋。其角が橋詰にかかると、向こうからやってくるみすぼらしい笹売りにふと足をとめました。

「お前は子葉ではないか」

はっと上げたその顔はまさしく其角の俳句の弟子である大高子葉こと源吾。はて、その格好はさても困窮してのことであろうと察し、それには触れないで様々な世間話などした後、別れ際に其角が

年の瀬や水の流れと人の身は

と上の句を詠むと、源吾がただちに

あした待たるるその宝舟

と返しました。

其角は源吾の「その宝舟」とつけたその真意を知らず、かれの身を哀れみ、きっとどこかへ仕官でもしたいのだろう、などと勝手な解釈をしました。その翌日、其角は赤穂浪士討入りの報せを受けます。あの笹売りの姿こそ吉良邸密偵のために源吾が身をやつしたものだったのです。其角は己の無知を大いに恥じ入りました。

翌元禄十六年二月四日、鶯の鳴く静かな春の日。大石良雄以下四十六名の赤穂浪士は自刃します。家で一杯飲っていた其角は、この突然の報に、

うぐいすに此芥子酢はなみだかな

と詠み、はらはらと涙を落としたといいます。

魚河岸の喧嘩仕法

魚河岸の旦那衆が根生いの江戸ッ子であるなら、店の若い衆は空威張りの江戸ッ子の象徴的存在です。「いなせ」という言葉は、この連中の髷のかたちが魚のいな（鰤の幼魚）の背に似ていることから生まれたもので、魚河岸の若い衆といえば侠気を地でいく江戸ッ子の鑑でした。何しろ朝だけで千両もの金が動くといわれた売場。ものすごいスピードで売買が行われます。あつかうものが鮮魚ですから、手早さが勝負というわけで、かれらの言葉は、大変にぞんざいで乱暴でした。

「名物は喧嘩で市場に日には五ツも六ツもある。心中却て毒なく義に富む。これが江戸時代から明治になって自由競争、個人主義、利己主義が盛んになり江戸ッ子気質は亡びて行く」（森火山談）（東京魚市場卸協同組合所蔵）

「おい、その鯛と鰈はいくらだ」

「三枚で口明けだ。安くまけて四貫だ、ナニ、三貫にしろと、何を寝惚けてゐやがる、顔を洗って出直して来ねえ、鉄の草鞋はいて河岸中探してもありやしねへ、いやなら、よしねへ、何だと、目が赤くなってゐる、と、馬鹿も休み休み言ひねへ、今しがたまでハネクリかへってゐたのだ、人間だってこの東風ぢゃあ、のぼせて目も赤くならあ、ヤイヤイ気の短けえやつだ、エヽ呉れてやれ、持っていきねへ」

まるで喧嘩でもしているかのようなやりとりが魚河岸流の商いです。

実際に血気さかんな魚河岸の連中にとって喧嘩は日常茶飯事。江戸・明治・大正と三百年以上を通じて、魚河岸は喧嘩に明け暮れました。それも小さな小競り合いから歴史的な大喧嘩までさまざまです。

まず小さな喧嘩などは毎日起こります。何しろ河岸の若い衆の娯楽といえば博打と喧嘩。ことに喧嘩となれば、これが飯よりも好きときています。

「おう、これからひとつ喧嘩をしに行こうじゃねえか」と、他の町内に繰り込みます。興がのりますと「今日は神田の青物市場へ行こう」、「浅草をやっつけよう」「吉原へ殴りこもう」など十人、二十人が群れをなして喧嘩の遠征に出かけました。

のちの築地市場の大立者といわれる田口達三氏の自伝『魚河岸繁盛記』によれば、大正時代に白木屋で、気の荒い連中向けに「魚河岸の帯」などというものが売り出されたといいます。まず前も合わせられない身巾のせまい単

衣ものをはおり、そこにこの帯をうしろから巻いて前で結ぶと、これが喧嘩装束となります。なぜこんなおかしな格好をするかというと、喧嘩した相手の方が強くて分が悪くなったとき、後ろから捕まえられても、パッと帯を解けば、そのまま素っ裸で逃げ出せるという寸法です。

「誰が手前なんかに捕まるかい！このバカヤロウ！」と叫びながら、ふんどし姿の馬鹿野郎が日本橋通りを走って逃げる光景が見られたそうです。

もっと大袈裟なものになりますと、町内総出の大喧嘩に発展します。これがたいそう血沸き肉踊る行事でした。記録によると幕末は文久年間。日本橋本材木町にある新場の魚市場へ芝の雑魚場から大挙して攻めてくるという噂が流れました。どこかの魚問屋が勝手に他人の持浦（産地）を分捕ったとかいうことが原因ですが、理由など何でも良い。日頃いまいましく思っていた相手と一戦交えるわけですから、新場の連中はわっと沸き立ちます。

「おう手前ら、ここはひとつ俺っちに命をあづけてくんねへ」アニキ分が言うなり、白襷に後ろ鉢巻、勇み肌の連中が、それぞれマグロ包丁に竹槍、目つぶし、筋金入りの棒などを獲物に、庇に上がって「さあ来るもんなら来やがれ」とばかり、敵が押し寄せてくるのを今か今かと待ちかまえております。いっぽう女房連中は炊き出しに身支度の手伝いと、かいがいしく働きながら、「お前さん、芝なんかに上手取られるんじゃないよ」などとハッパをかけます。

この噂が江戸市中にぱぁっと広まると、物見高い江戸ッ子たちが大挙してやってきます。木戸銭なしのほんものの芝居見物と洒落こみまして屋台店は出る、かわら版売りは出る、一日の行楽としては最高の舞台となりました。

「サーどっちが勝つかねえ！」

「まあ、ねばり腰のザコバ、勢いのシンバってえとこでしょう」

「どっちみち血を見なけりゃ済まねえ続柄だねぇ。こりゃあ楽しみだぁ」

結局この事件は双方の顔役の仲裁により手打ちとなりますが、何しろ魚河岸連中の気組の荒さは後々まで語り草になりました。しかし、その最中にも八丁堀の同心たちは見て見ぬふりをしたといいますから、やはり娯楽の一種だったのでしょう。

ところで、日本橋魚河岸は幕府納魚の義務を負っていましたが、その重責に耐えかねた魚問屋たちは次第にお義理の上納をするようになります。それに我慢ならない幕府は、寛政四年（一七九二）、江戸橋際に御納屋役所を設け、強制的に魚を取り上げることにしました。これが大変な事態を引き起こすことになりまして、魚河岸誕生以来の大喧嘩がおこります。以下、この事件を実録講談風に追ってみましょう。

御納屋役所の取立ては、峻厳過酷きわまりて、問屋・仲買・小売商、泣きの涙に暮れました。河岸の事情に通じる者が取立人に雇われて、御用御用の乱用で、役人風を吹かせます。懐手にして手鉤持ち、店のなかまでかき回す、小売の飯台取り上げる、どこの問屋に入荷があると、聞けばすぐに飛んでいき、すべてを分捕る凄まじさ。我が物顔で闊歩する、取立人の横暴に、さても商い成り立ちがたしと、進退窮まる魚屋の、一計案じて取るすべは、浜から届くお魚を、右から左に隠しては、つづら長持ち仕舞い込み、箪笥の中に秘匿する。ひどい時には雪隠の、鼻をつまんだ隠し事。問屋の店先魚なく家の中では生臭い、まったくもって逆さまのおかしなことになりました。

魚河岸では取立人との丁々発止が長く続き、疲れ果ててしまいました。お上に「何とかして下さい」と泣きつきます。そこで役所と魚河岸の間に「建継所」というものが設けられることになりました。これは問屋が浜から魚を仕入れる際に仕切金の百分の一を積立て、役所からの支払が魚の値段に見合わない場合はそこから不足分を補充するという制度。言ってみればみんなで苦労を分け合おうという妥協的なものでした。これが功を奏して一時は騒動も収まりかけますが、長続きしません。それというのも、建継所を運営する行事連中が次第に横柄な行動に出たからです。

魚を隠す。御納屋が来ると客と商売でない話しをし、御納屋が通り過ぎると、客を台所へ連れて来て魚の商売の取引をする（東京魚市場卸協同組合所蔵）

建継所の行事らは、我こそお上の代理人、官僚気分にふんぞり返る。役人らには良い顔し、魚屋風情には屁の河童。御用魚の取り立ては、厳しくあたる一方で、助成金を出し渋る。お定まりは袖の下、自らうるおす、お手盛り役目。あげくの果ては役人と、一緒になって問屋連、絞るありさま惨たらし。何のことない以前より、ひどいことになりました。

このままでは魚河岸に将来はない！

もはやすべての元凶の、建継所をば打ち壊し、活路を開く他なしと、ついに我慢の限界に、達した河岸の兄ぃ連、すなわち河岸のなかでもとびきりの、男の中の男を自認する、

西宮利八（にしのみやりはち）
伊勢屋七兵衛（いせやしちべえ）
神崎屋重次郎（かみさきやじゅうじろう）
佃屋彦兵衛（つくだやひこべえ）
伊勢屋亀太郎（いせやかめたろう）

血気盛んな五人の男、大包丁を振りかざし、暁のなか建継所、いざ出陣と踊り込む。かれらの決死の突撃に、色めき立ちます魚河岸の、喧嘩のことなら飯よりも好き。よその騒動買って出る、血の気の多い連中だ。常々憎きは建継所、その不満は爆発し、手鉤、包丁、得物を持って、五人衆の後を追う

「かれらに怪我をさせるな！」

「役人に化けた泥棒を打ち殺せ！」

皆口々に叫んでは、上げた拳を下ろさない。いつのまにやら橋詰めは、百人を越す大群衆。鼻息荒き連中がぞろりと囲んだ建継所。心強き助っ人の熱狂声援背に受けて、はやる心の五人衆、頭にカーッと血が上り、はじめは脅しのつもりでいたが、ついには包丁振り回し、相手に怪我を負わせてしまった。さあこうなると大事件、ただでは済まぬお定めだ。罪人、下手人、さらし首、下手すりゃ魚河岸取り潰し。問屋・組合・お偉方、血相変えて駆けつけて、何とか事を治めたい。割って入ってみましたが、頑と動かぬ五人衆。ここでこの手を引いたなら、我らの行動無駄になる。いざとなればこいつらと、刺し違えて死ぬ覚悟。役人たちの咽喉仏、二尺五寸を突きつけて、一歩も引かぬ心意気。これでは生きた心地もせぬと、音を上げたのは役人だ。命ばかりはお助けを、河岸の群集証人に、この建継所を取り潰す約束交わす起請文、泣きの涙で書きました。

公儀の役人向こうに回し、大立ち回りの魚屋風情。まこと天晴れ魚河岸の勇み肌なら天下一。その男気を知らしめた五人は江戸中の評判になりました。

こうして魚河岸を苦しめた制度は一掃され、ふたたび平安が戻ってまいりました。しかし、これだけの騒動を起こしては、お咎めなしとはいきません。即刻五人は召捕られ、残念なことに吟味が済む前に五人とも牢死してしまいます。魚河岸の人びとはかれらの冥福を祈り、両国回向院境内に石造の五輪塔を建てて手厚く供養しました。

これが歴史に残る魚河岸の大喧嘩「建継事件」の一幕です。

江戸防衛軍始末記

魚河岸の若い衆の侠気に富んだ行動力は、江戸の市民からは誉められますが、いっぽう支配階級から見れば噴飯ものに映ったことでしょう。西山松之助氏が『江戸ッ子』のなかで高級幕臣である村山摂津守の著『村摂記』をとりあげ、「江戸子と唱へる日本橋芝等の魚河岸から鳶の者杯、甚だ危険だからで、中々鼻張りの強き者多く、ちと煽動したらすぐだからです（ルビ筆者）」という下りに、支配者が江戸の町人を見下していたことを明らかにしています。魚河岸や鳶などは危ない連中だから、煽動すればすぐ兵隊として使えるというのです。

時は慶応四年（一八六八）、会津・桑名を主力とたのむ一万五千の幕府軍は鳥羽伏見の戦いで敗れました。勢いづく官軍は江戸に向かって東進してきます。それでも江戸には徳川の旗本八万騎は温存され、起死回生の戦ができるはずでした。しかし、三百年もの太平に慣れてしまった幕臣たちに戦意乏しく団結力も持ち合わせない体たらく。なかには江戸を後にして、逐電するは卑怯者。尻をまくってハイ左様なら――という事態に幕府は、町奉行所を通じ、何と魚河岸並びに鳶の連中に町兵として江戸防衛にあたるように命じました。威勢を張った魚河岸の喧嘩好きもここに極まり、ついに錦の御旗を相手に悲愴の大立ち回りを演じることになったのです。

魚河岸問屋・仲買の、すべての顔が集って、評議をはじめてみたものの、奉行所からのお達しをきいたとたんに一同は、水を打った静けさに、黙りこくるは思案顔。さしもの威勢の良い連中も、今度ばかりは荷が勝ちすぎる。互いに顔を見合わせて、ただただおろおろするばかり。

このとき、魚河岸総代をつとめる相模屋武兵衛、といえば全身刺青をまとい男気で鳴らした大立者。ぐっと腹に力をこめると、「皆の者、心して聞いてもらいたい」と口火を切ります。

我らは元和慶長の、古き御世より将軍様の、お魚御用をつとめてまいった。長きその間さまざまの、紆余曲折はあらばこそ、なおも魚の商いを、続けられるはお上のおかげ。今こうして我々に、援助の力を請うてきた。町奉行より直々に、助力を請うてきたものだ。今こそ我らが恩返し。お江戸直参魚屋の、心意気をば見せようぞ。

「だいいちだよ、薩摩だ、長州だのと、とんだイモや三ピンの官軍の名を借りた紙屑拾いに、この日本橋を渡らしたら、それこそ江戸ッ子の名折れじゃねえか。こいつぁな、沽券にかかわることなんだぜ」

武兵衛の熱のこもった弁舌に、訳もないまま感激し「そうだ、その通りだ」「やろうじゃねえか！」皆、口々に叫んでは立ち上がり、腕を振るのでありました。

無謀といえば、あまりに無謀。引くに引けない河岸の気風が、ただいたずらに駆り立てられて、時代の波の真っ只中に突き進んでまいります。

数万の幕府軍を打ち破った官軍に対し、町人が立ち向かうなど、まるで自殺行為にも等しきもの。しかし、いったん火のついた魚河岸連中を止めることなど、誰にもできやいたしません。さっそく武兵衛総大将に魚河岸会所を本陣に、準備万端ぬかりなく、防衛軍を組織します

一　集合・離散には　太鼓鳴り物合図とし　単独行動すべからず

日本橋魚河岸のハテナ？コラム

江戸の繁栄の下で魚河岸は日に一千両の独占的な商売を誇っていたが、天保の改革による規制緩和で幕府の後ろ盾を失い、大きな転換期をまねく

魚河岸というのは、かつて日本橋のたもとにあった魚市場のことをいう。

さかのぼること四百年前、摂津国佃村の名主森孫右衛門を筆頭とする漁師三十余名が家康に従って江戸入りし、江戸前海での漁業を許されるとともに、そこで獲れた魚を御城に納め、そのあまりを市中に売ったのが商売の魚河岸のはじまりとされている。

日本橋は江戸の発展と共に商業の中心地として繁栄をみるが、そのなかにあって魚河岸はとりわけ活況を呈することになる。「千両は朝のうち」といい、江戸では日に三千両という金が動くが、そのうちの千両は朝の魚河岸で動くといわれた。ほかに昼に芝居町で千両、夜は吉原で千両、都合三千両である。江戸市民にとって魚介類は貴重なたんぱく源。ことに鮮魚を三日食べなければ骨がバラバラになると自認するほどの魚好きであったから、その供給元の魚河岸はたいそうな繁盛をみるのである。

江戸前海の豊富な漁獲物を背景に繁栄を続ける魚河岸であったが、それは日本橋魚問屋が産地の漁業者であることによって成立するものであった。魚問屋らは自分の持浦（契約産地）の漁業者に対し、漁具の購入・補修資金から、漁夫の雇用や食事の費用まで前貸しをして、そのかわりに漁村の全漁獲物を引き取る。このときに漁獲物の代金は魚問屋の都合で決められたため、魚問屋は少額の仕入金で漁業者から魚を収奪することができた。しかも、産地での集荷は在地の魚商人が仲介するために、さらに効率的な集荷を可能としていた。一方で漁業者は魚河岸支配からのがれたくても、いっぺんに仕入金を返済することができない仕組みになっており、いつまでも魚問屋に隷属することを強いられる。

魚河岸の産地支配は、天保の改革によって流通の独占が緩和されたことで大きくゆらぐこととなり、さらに時を経ずして幕府は瓦解。後ろ盾を失った魚河岸は、明治以降、近代社会のなかにとり残されながら、日々の販売競争に明け暮れていくことになる。

●以上は、『フードカルチャー』誌第十六号で詳しくお伝えしています。

一　いざという時　仮病にて　逃避したるは　以後一切　市場商い差止めのこと

一　軍役の名をば借りての　上納品おこたることを固く禁ず

一　合言葉は「舟」と言えば「水」と答えること

いかにも素人丸出しの軍令・規律取り決めて、連日魚河岸会所で軍事会議を行うなど、準備怠りなくやっておりましたが、毎日皆で集まって、炊き出しもあれば酒もある。酒が入ればいつもの通り、気ばかりどんどん大きくなって

「あんな田舎侍なんざ犬の糞よお」などとすっかり良い気分になっています。

そうこうするうちに、西郷吉之助を大将とする官軍が品川あたりに迫っているとの町方筋の急報に、一気に色めき立ちます。

さそくに太鼓打ち鳴らし、いざ出陣のトキの声、飛び出しましたる防衛軍。威勢ばかりは立派だが、いくさ装束見てみれば、サシコ半纏、股引きに、草履ばきやら地下足袋と、頭に巻いた手ぬぐいに染め抜いたるは魚河岸の文字。獲物といえば包丁に、手鉤、鳶口、商売道具。どこを見ても軍隊というより田舎の小芝居の一座の門出と相成りました。

それでも日本橋の際、数百人の者たちが終結するは勇ましき。各町内の月番が隊伍号令整えてぞろりと揃った兄い連。

敵がこちらに向かってきても、うかつに出てはいけねえよ。奴さんには大砲や鉄砲やらがたんとある。我らに勝機はただひとつ。敵のスキつく接近戦。肉弾戦に持ち込めりゃ、刀よりもゲンコツだ。弾丸より気組みの勢いだ。

我らの力を存分にぃ、奴らに見せて、あ、しんぜやしょうかぁ！！

などと大見得を切って、さあこれから一世一代の大喧嘩。いざ出陣、というその時でした。

「……やめ？　やめだと？」

「やめってそりァ、どういうことでい？」

この日、二月の十四日、勝海舟は高輪に、官軍参謀西郷の吉之助をば訪のうて膝詰め談判二日間。男と男が腹を割り江戸城無血の明け渡し、一身かけての約束を、まことをもって取り交わす。これによりて江戸市中、戦火にまみゆることもなく政権交代、平和裡に行われたのでございます

幕府の危機を見過ごせず、身体を張っての戦いを決意した心意気は評価できるものの、もしも官軍が市中に攻め入ったならば、惨劇が起こらなかった保証はありません。たった一人の怪我人も出さなかったのは幸いといえるでしょう。

そして魚河岸は消えた

こうして幕府は瓦解。文明開化の世を迎え徳川の後ろ盾を失くしてしまった魚河岸の運命はどのようなものであったでしょうか。水産業には産業資本が入り込み、江戸以来の産地支配力を失った魚河岸には、集荷と販売に血道をあげるよりほかありませんでした。狭い市場内での過当競争に明け暮れ、東京市の人口急増による需要増によって命脈を保つものの、近代日本に取り残された魚河岸は、前時代的伏魔殿として孤立します。新東京の真ん中に生臭い市場は迷惑だとばかり、何度も移転命令が下ります。そして大正十二年（一九二三）、関東地方を襲ったマグニチュード七・九の関東大震災の襲来。

大正12年（1923）9月1日、関東地方を襲った大震災による火の手は、同日夜半に魚河岸を包みこんでいった（東京魚市場卸協同組合所蔵）

市内各所で上がった火の手は魚河岸にも迫ってまいりました。必死の防火に努めるも、どうにもなりません。船を持っている者は日本橋川を東京湾へと逃れようとしますが、火は川面をなめるように渡ってくると、人びとを容赦なく焼きつくしました。大自然の猛威になすすべもないまま、江戸以来三百年の歴史ある魚河岸は灰燼に帰してしまったのです。

現在の築地市場に魚河岸の残滓を見ることはできます。しかしその文化的気風は江戸ッ子らのものであり、今は懐古の物語となりました。関東大震災後、あたらしい秩序のもとに築地市場が生まれて七十年余。築地魚河岸三代目たちが現れるまでのお話は、いずれ稿を改めたいと思います。拙文読了、まことに有難うございました。（了）

挿絵画家　森火山について

森火山（本名森薫三郎）は明治十三年（一八八〇）、日本橋魚河岸で魚問屋を営む森源兵衛（五世）の三男として東京・日本橋区本船町に生まれる。火山も同業の西長（本小田原町）で働くかたわら、独学で絵画を学ぶ。その後毎夕新聞、時事新聞に籍を置き、大正五年結成の東京漫画会に所属する。父親の薫陶を受け、本人自ら「日本橋魚河岸研究画家」を名乗り、多年の歳月を費やして江戸初期から大正時代に及ぶ「日本橋魚河岸の人と暮らしと商い」を絵筆により活写、克明かつ史料的価値が高い膨大な労作を今日に残している。昭和十九年（一九四四）十月、東京・港区白金にて没。

参考文献

・「魚河岸百年」（魚河岸百年編纂委員会・日刊食料新聞社・一九六八年）
・「江戸っ子」（江戸選書1・西山松之助著・吉川弘文館・一九八〇年）
・「魚河岸盛衰記」（田口達三著・いさな書房・一九六二年）
・「魚河岸百年余聞」（三浦暁雄著・日刊食料新聞社・一九六八年）
・「日本橋魚市場の歴史」（岡本信男／木戸憲成著・水産社・一九八五年）
・「江戸の夕栄」（鹿島万兵衛著・中公文庫・一九七七年）